ミクロネシアの離島で日本文化を考える
——妖怪譚を中心に

小松 和彦

中央カロリン諸島の生活文化調査

若いころ、ミクロネシア（旧国際連盟委任統治領南洋群島）の中央部を占める中央カロリン諸島の一つ・ウルシー環礁とポンナップ環礁において、島民の生活文化の調査を行ったことがある[1]。

中央カロリン諸島は、ヤップ島からトラック諸島に至る地域を指している（図1参照）。戦後、ミクロネシア地域は国連の信託統治領として米国が統治しており、長い間、日本人の入域が制限されていたが、1970年代からは日本人研究者も長期の入域が可能となった。それを機に、文部省の科学研究費を得て調査団が編成されたので、私もその調査団に参加することになった。

私はそのころ、四国の山奥（高知県香美郡物部村）に伝わる民間宗教「いざなぎ流」の調査とその延長上に浮かび上がってきた陰陽道や呪詛・妖怪の研究を進めていた。それにもかかわらず、その研究をなかば中断するかたちでミクロネシア調査に赴いたのには、いくつかの理由があったが、一番の理由は、社会の全体を一人で見渡せるような、小さな異文化社会に身を置いて、その社会の仕組みを調べ、それを通じて、日本の文化を「外」から眺めてみたかったからである。きっと、その体験は、文化人類学者たちの異文化調査記録を日本にいて読んだとしてもわからないようなことを教えてくれるにちがいないと思ったのである。

本格的な調査を行ったのは、ポンナップ環礁である。ポンナップ環礁は、トラック（チューク）環礁の西方約26キロ、北緯七度33分、東経149度25分に位置する環礁で、環礁島はポンナップ、タマタム、ファナリックの三つであるが、ファナリックは無人島で、ポンナップの首長が所有し、かつてはポンナップ島民の埋葬地であった。人口は約500人。タマタムは、主島であるポンナップの南方に位置し、ポンナップの支島的な立場にあり、島名もカヌー本体を支えるアウトリガー（浮子）に由来する。人口は約100名。私が調査していたころの環礁へのアクセスは、トラック諸島から、年に数度の不定期連絡船を利用するか、大金を叩いて漁船をチャーターするしかなかった。所用時間は直行で約半日。

ポンナップの主食は、タロイモとパンの実、現在は購入した米も食べる。これに海から獲ってきた魚貝類が副食となる。豚や鶏、犬もときどき食べる。ポンナップとは、「ポ」（カヌーの航海術伝承・伝授者、師匠）+「ナップ」（偉大な）、つまり「偉大なポ」の島という意味である。

---

1 ミクロネシアに関する概説は、英語文献では、William H. Alkaire, *An Introduction to the Peoples and Cultures of Micronesia* (California:Commings Publishing Co., 1977)、日本語文献では印東道子編著『ミクロネシアを知るための60章』（明石書店、2015年）などを参照のこと。なお、ポンナップ島の本格的定住調査は、文部科学省の科学研究費補助金等を得て、1980年から1997年にわたって、それぞれ半年から数ヶ月間、断続的に行った。1997年の調査は、主にNHKスペシャル「黒潮」の撮影隊を案内して「ポ」儀礼を詳細に撮影・調査するためのものであった。1977年に行ったウルシー島での調査は私費によるものである。

この地域の伝承によれば、中央カロリンの島々のカヌー航海術には、「ウヮリエン」と「ファンゥール」という二つの流派があり、ポンナップはウヮリエン派の発祥の地で、かつては「ウヮリエン」（語義は「風を見る」）という航海の神を祀る祠があったという [2]。ポンナップでの調査では、とくに伝説や昔話の採集に力を入れた。

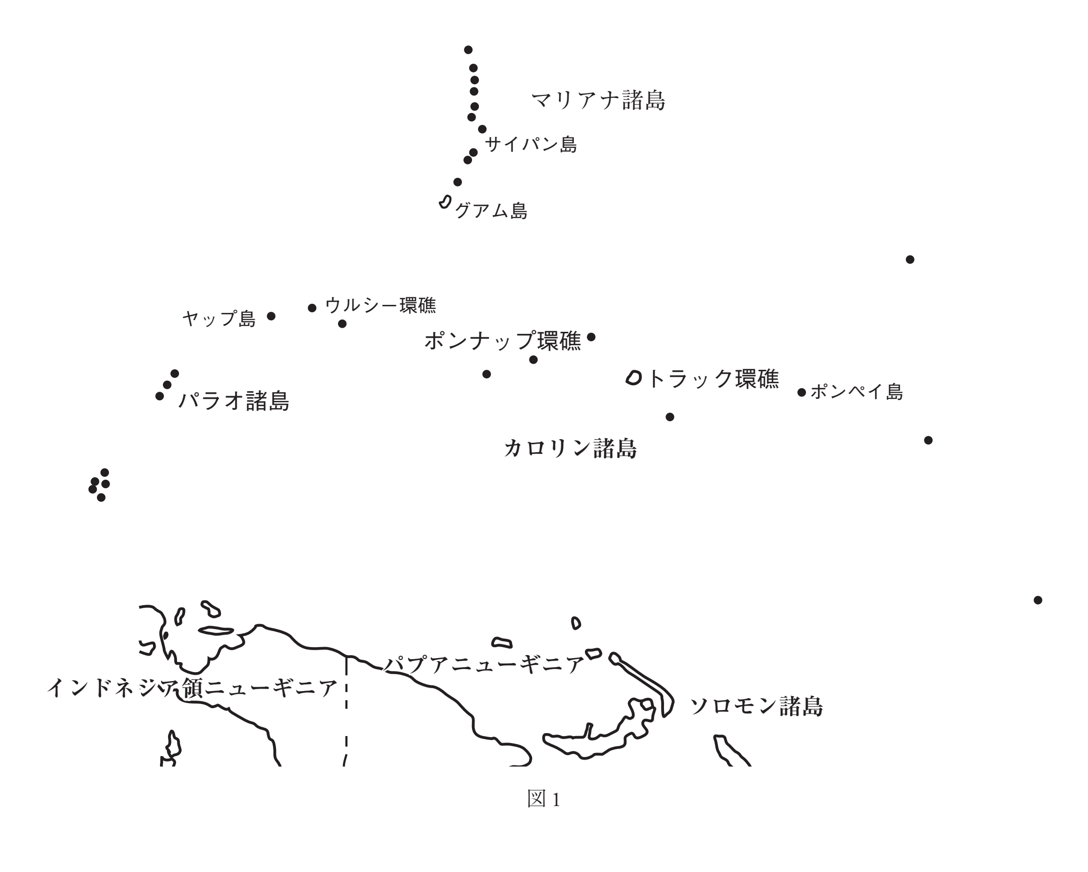


図 1

伝説・昔話の採集の前提――母系出自・妻方居住集団

異文化の伝説・昔話を研究することは、自文化の伝説・昔話を研究するのとは違って多くの困難が伴っている。その前提として現地の文化の理解が必要だからである。例えば、ウリシーであれ、ポンナップであれ、昔話のなかに登場する親子は、「昔々、誰それという娘が、お母さんとどこそこに住んでいました」というふうに、母と子として語られることが多いのだが、これはこの地域の社会が伝統的には母系で母方居住が一般的であったことを反映している。また、昔話のなかの主人公は、次々に出会った女（男）と「遊ぶ」（セックスする）が、その話をなんの説明もすることなしに日本語訳にすると、なんというプレイボーイ、プレイガールということになってしまうが、ポンナップでは、キリスト教に改宗するまでは、生涯一人の夫、一

2　小松和彦「聖なる島ポンナップの島名起源説話」、川田順造、徳丸吉彦編『口頭伝承の比較研究』第 2 巻（弘文堂、1985 年）、136–152 頁。

人の妻をもつのが好ましいといった考え方はなく、次々に夫（妻）を変えていた。この社会では、夫婦の絆は淡いものであって、社会を構成する単位にはならなかったのである。例えば、ポンナップには「結婚」という用語も、「家族」に相当する用語もなかった。現在は結婚については「アブップル」、家族については「ファミリー」と表現するが、これはトラック本島から戦後になって入ってきた概念で、この「アブップル」は「カップル」が訛（なま）ったものだと考えられている。夫婦のことを「プップル」というが、これも同様であろう。

ポンナップは母系制・妻方居住婚を原則とする「母系出自集団」（matrilineal descent group）の社会で、これは女性が産んだ者たちによって集団を編成するということを意味する。この集団を現地語で「アイナン」という。これは人類学でいうクラン（clan：氏族）に相当する。集団は母系（女系）であっても、政治的権力は男たちが握っている。ポンナップ語で男を「ムワァン」、女を「ロープット」というが、「ロープット」とは「穢れた者」という意味である。

ポンナップに存在するアイナンは六つあり、それぞれいくつかの支族（サブ・クラン、リネッジ［lineage］）に分かれて生活している。六つのアイナンは序列化されており、その最上位に位置するマーサルは、伝統的首長を出すアイナンということを意味する「ホー・ポンナップ」（ポンナップの人）という称号をもっている。マーサルの最年長者が自動的に「ハモル」（伝統的首長）となる[3]。

島内の政治は、形式的には島民たち全員による合議で決めることになっているが、実質はそれぞれのアイナンの有力な長老たちと選挙で選ばれた村長と数人の議員たちが集まって決めている。これらはすべて男性である。また選挙で選ばれた村長も慣習的にマーサルから選出されている。女性は表面的には政治の舞台には出てこないが、各アイナンの長老格の女性も隠然たる力をもっており、男たちもその意見を容易には無視できない。

このアイナンは、カヌーに例えられる。アイナンの女たちは、自分のアイナンの男たちを「ムワァン・ナ・ワーイ」（私のカヌーの男）と表現し、自分のアイナンの女のパートナー（配偶者）として移り住んできた他のアイナンの男を「ムワァン・ナ・プイトイ」（私のカヌーに流れてきた男）と表現する。

この社会では、セックスをとても大事する。最大の快楽だと思っている。しかし、恋愛は熱しやすく冷めやすいことも知っており、戦後、島をあげてキリスト教に改宗してからは、一夫一婦制が奨励されるようになったが、以前は、同棲していても、その男（女）が嫌になったらすぐに別れてしまっていた。

この社会では、セックスでつながっている男女の関係よりも、アイナンの女が子どもを産むことが重視される。それがアイナンの存続・繁栄を保証するからで、このため、女が子どもを産んだとき（とくに初児を産んだとき）は、一族を挙げて大きな祝宴「ウームウィナウナウ」（ナウとは出産すること、ウームとは祝宴用の大きな食器を意味する）を開く。このとき、産婦の同棲者（夫）側の一族（アイナン）は、その子どもに、自分たちの土地の一部を贈与する。この土地は、女の同棲者（夫）が別の女のところに去ってしまったとしても返却されることがない。したがって、この夫側からの妻側への贈与が、ある程度、男のプレイボーイ化を制御している

[3] 詳しくは、小松和彦「ポンナップ島の首長制素描」、小川正恭、渡辺欣雄、小松和彦編『象徴と権力』（弘文堂、1988年）、222–245頁。

ともいえるだろう。次から次に別の同棲する女に子どもが生まれたら、男のアイナンの財産が流失してしまうからだ。また、父方のアイナンから土地を分与された子ども（「アファクル」と呼ばれる人たち）は、さまざまなかたちで父方のアイナンに奉仕することが義務づけている。

ポンナップの親族名称

こうしたアイナン中心の社会編成は、親族の関係を示す名称にも現れている。この社会の親族名称は、日本のそれとは著しく異なっている。図 2 は、日本の親族関係名称を示したもので、人類学では、△を男、○を女、□を男もしくは女を表し、このタイプの親族名称をエスキモー型と呼んでいる。「チチ」の兄弟姉妹、「ハハ」の兄弟姉妹を「オジ」「オバ」と称し区別している点に特徴の一つがあり、父方と母方の名称が相似している点も特徴である。また、このような親族名称を用いつつも、社会集団の基礎は男系的傾向が強い「イエ」と呼ばれる集団によって営まれている。

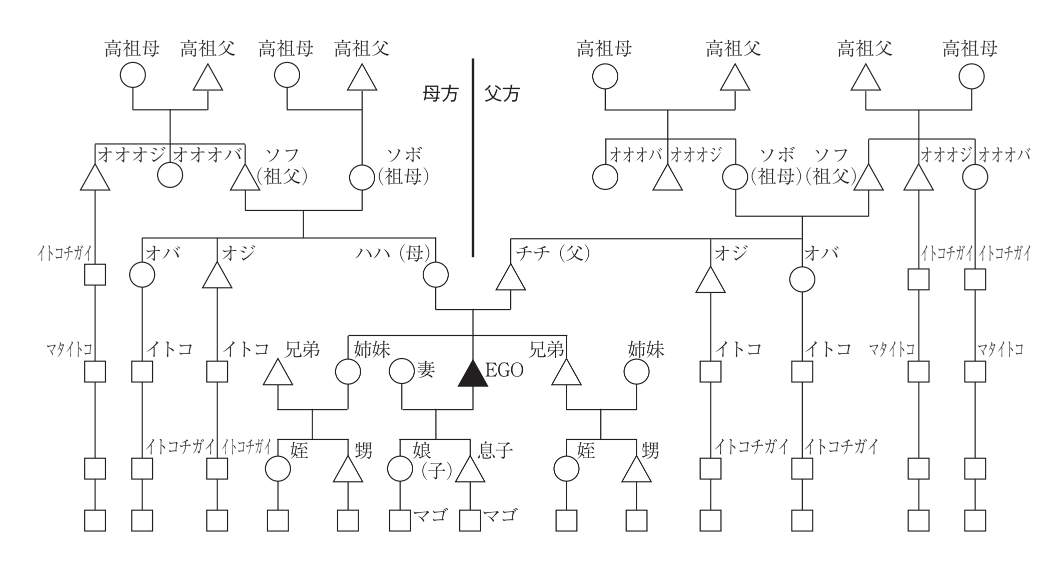


図 2　日本の親族関係名称（EGO が男の場合）

これに対して、ポンナップの親族名称は、人類学でいうクロウ型で、アイナン（母系出自集団）と性別、世代を基礎に作られている[4]。「お母さん」とか「お父さん」といった呼びかけの名称（親族呼称）はない。図 3 および図 4 はポンナップの親族関係名称を示したものである。この図は、図 2 の日本の親族関係名称との対照を考えて図式化している。日本の関係名称に慣れている者からすれば、不思議に思われる関係名称である。というのも、例えば「オバ」に当たる名称がなく、それが「ハハ」になっているからである。

以下、これを少し詳しく見てみよう。図 3 は関係図の基点（EGO）を男にして見たときの名

[4] 詳しくは、小松和彦「ポンアップ島の親族名称と表敬・忌避行動」、牛島巌、中山和芳編『オセアニア基層社会の多様性と変容── ミクロネシアとその周辺』（国立民族学博物館研究報告　別冊 6 号、国立民族学博物館、1989 年）、73–91 頁。

称で、図4は基点（EGO）を女にして見たときの名称である。

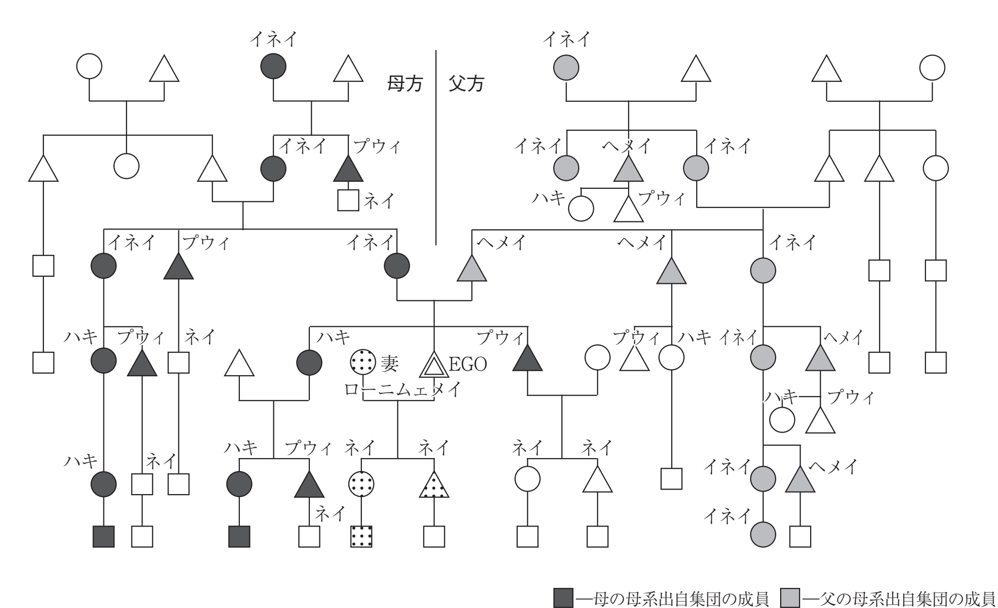


図3　ポンナップ親族関係名称（EGOが男性の場合）

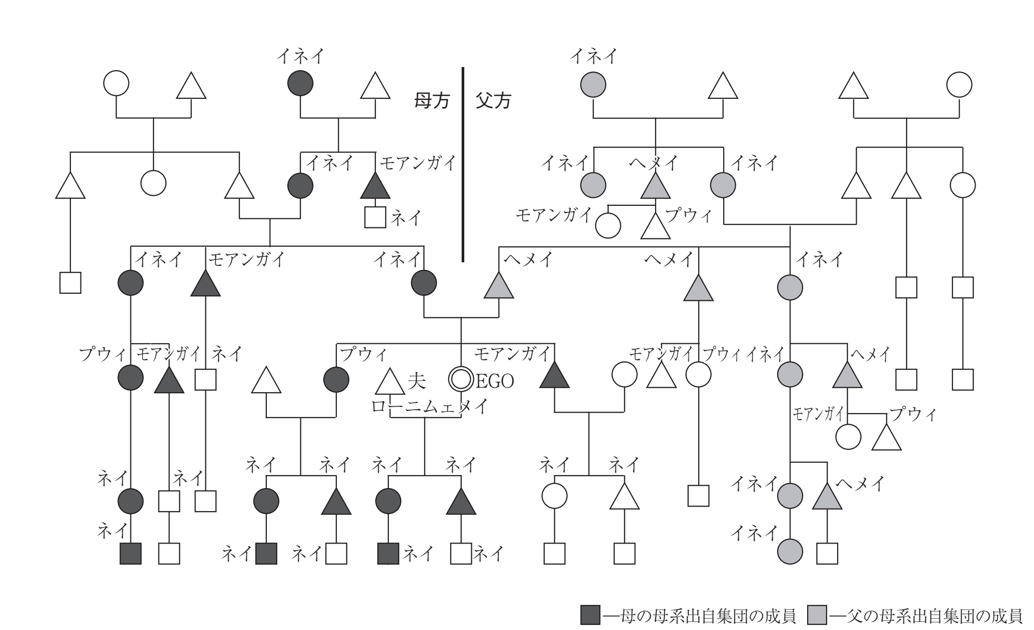


図4　ポンナップ親族関係名称（EGOが女性の場合）

これによりながら説明すると、男（EGO）から見た場合、自分が属するアイナンの男のメンバーは、世代に関係なく、「プウィ」（兄弟）という。奇妙に思うかもしれないが、私たちの社

会ではオジやマゴにあたる者たちもプウィなのである。また、女性同士の「姉妹」も互いにプウィという。男の立場から見て、女の「姉妹」は、同世代の女と下の世代のすべてをさして「ハキ」といい、女（EGO）の立場から見て、男の「兄弟」は「モアンガイ」という。さらに、男の立場からみて、自分が属するアイナンの女のメンバーのうち、上の世代の女はすべて世代に関係なく「イネイ」（母）という。この社会では、自分を産んでくれたイネイの同棲者を「ヘメイ」（父）と呼ぶが、同じアイナンのなかには、ヘメイ（父）も、「ネイ」（子）もいない。

では、男の立場からみて、ヘメイにあたる人はどこにいるのだろうか。彼（正確には彼らといったほうが正しいのだが）にとって、自分を産んだ女の同棲者（私たちの社会での夫）が属するアイナン（誕生したときに財産を自分に分与してくれたアイナン）の男のメンバーすべてが「ヘメイ」（父）と呼ばれる。また、そのアイナンの女性メンバーのすべてがイネイ（母）となる。

ただし、女性の立場からみた場合、これとは少し異なっている。自分が属するアイナンの女性のうち同世代は、女同士はさきほど述べたようにプウィであるが、下の世代のメンバーたちは、男女を問わずネイ（子）となる。繰り返しになるが、男の立場からみると、自分が結婚した女が産んだ子は女のアイナンに属し、自分のアイナンには属さないのだが、その子を「ネイ」（子）と呼ぶのである。また、自分が属するアイナンの男が他のアイナンの女と結婚し、その女が産んだネイたちは、まとめて自分のアイナンの「アフォクル」とも呼ばれる。

わかりにくいかもしれない。そこで、図 3 と図 4 の関係名称を、この社会の親族集団の基礎となるアイナン（母系出自集団）をもとに整理し直すと、図 5 ～図 6 として示すことができる。図 5 は、EGO が男の場合の EGO のアイナン内の関係名称と EGO のアイナンの男性成員の「コ」の名称を示したものである。これに対して、図 6 は、EGO が女の場合の EGO のアイナンの関係名称と EGO の男性成員の「コ」の名称を示したものである。また、図 7 は、EGO が男の場合の「チチ」のアイナンの成員たちとその「チチ」の「コ」の関係を示したもので、図 8 は、同様に、EGO が女の場合を示したものである。

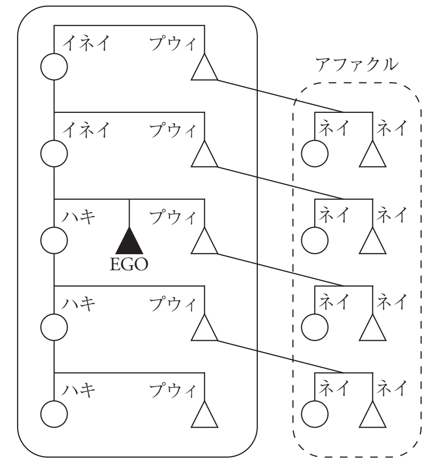


図 5　EGO（男）の母系出自集団の関係名称とその外戚名称

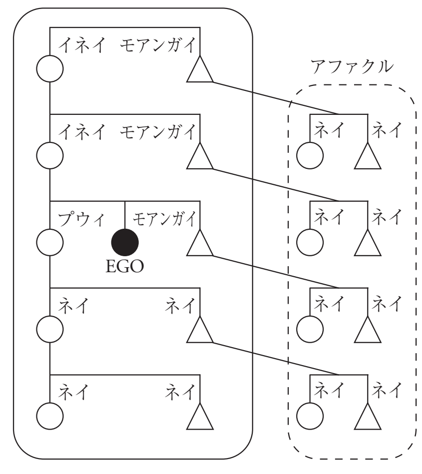


図 6　EGO（女）の母系出自集団の関係名称とその外戚名称

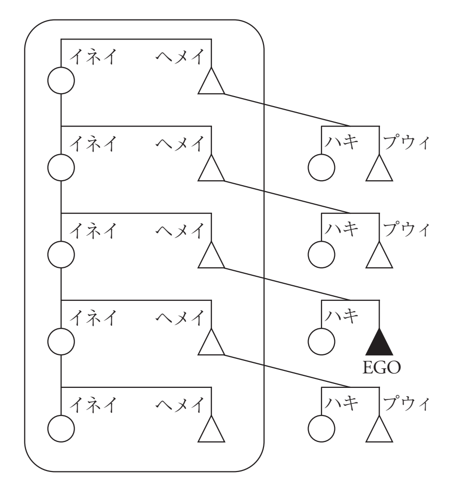


図7　EGO(男)の「チチ」の母系出自集団の関係名称とその外戚名称

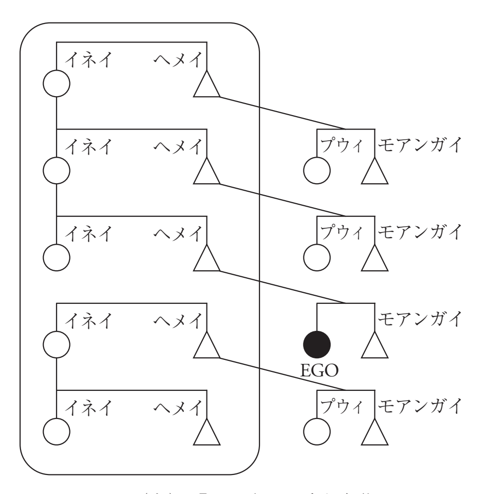


図8　EGO(女)の「チチ」の母系出自集団の関係名称とその外戚名称

このような社会では、私たちの社会とは異なり、「父」（母の同棲者）の社会的役割はきわめて低く、たんにアイナンの女に寄ってきた男たちであって、同棲しているあいだは、アイナンの二次的メンバーとして扱われるが、同棲期間中に女が子ども産まない限り、労働力が増えた程度の扱いしか受けない。

それでは、「父」に代わるような役割は誰がするだろうか。それは、母のモアンガイつまり私たちの用語でいえば「母方のオジ」（母の兄弟）や「母の母の兄弟」たちである。アイナンの男たちは、同じアイナンの下の世代のプウィ（甥）、つまり、同じアイナンの同世代のハキにあたる女が産んだ子どもを保護し養育する。そして、男のメンバーは、その個人的財産をプウィ（甥）たちに譲る。アイナンの長の地位（氏族長権）や、首長の地位も、同世代の年下のプウィ（兄弟）、次いで下の世代のプウィ（兄弟）に譲られる。

以上のことを了解すれば、実際、ウルシーであれ、ポンナップであれ、キリスト教に改宗する以前の世代に属する古老たちが、これまでの人生で、次々に「ローニームゥェイ」（配偶者、同棲者）や恋人、愛人といった性的パートナーを変えていったということも、不思議ではないだろう。今でもこの習慣は依然として残っているのである。島民の男と親しくなると、「お前のことを気に入っている女（ハキ）がいるので、夜、遊びに行かせていいか」と囁（ささ）やかれるのも当然なのだということがわかる。このように、夫婦の絆は淡いもので、女が、自分の腹を痛めて子ども（その父が誰であるかがわからなくとも）を産んだという事実こそが大切であって、この動かない事実を基礎に集団が形成されているのである。

このようなポンナップをはじめとする中央カロリンの社会集団の編成の仕方を調べていくと、本稿では詳述しないが、私たちの前に、日本の社会集団すなわち「イエ」という集団の特徴も次第に浮かび上がってくる。

ポンナップのシャーマニズム――改宗以前の伝統的神観念

戦後、米国の統治下に入ったとき、島民はカトリックに改宗し、その結果それ以前の伝統的な宗教（アニミズム･シャーマニズム）を放棄し、それに関連する祭祀施設も破壊した。しかし、宣教師たちも口頭伝承の類いを廃棄・忘却させることはできず、たくさんの伝説・昔話が現在でも伝えられている。

興味深いことに、その伝説・昔話には、キリスト教改宗以前の信仰や倫理観、生活習俗が語り込まれており、伝説や昔話の解読を通じて、キリスト教改宗以前のポンナップの生活が浮かび上がってくる。

ポンナップ人は、世界（宇宙）を、島（ファヌ）と海（レヘット）、天（ラン）に大別する。また、島は、「ファヌ・ピ」（砂の島・珊瑚礁島）と「ファヌ・チューク」（高い山のある島）に分けられている。島は大別して「人里」（モホール）と「森」（レワル）に分けられ、この「森」は、現在でも島民には、妖怪のようなものが出没する所として恐れられている。

ポンナップ語で人間のことを「ヤラマ」といい、カミ（神）に相当する語を「ヤニュー」という。例えば、海の神を「ヤニュー･レヘット」、悪神を「ヤニュー･エンガウ」という。また、霊魂を「ンゴル」、幽霊・死霊、化け物、妖怪などを「ホーマ」という。

また、キリスト教に改宗する以前には、人類学や宗教学でいう「シャーマン」に相当する宗教者・呪術師がいた。彼らは「ワー・ン・ヤニュー」といい、その語義は「神のカヌー」で、文字通り、神懸かって病気治療や預言をした。また、「ホー・ヨー・ンゴル」という宗教者もいた。この語義は「魂を探す者」で、魂をどこかに落としたり、ホーマに奪われて病気なったりした人を治療するために、病人から失われた魂を探してくることができる、と考えられていた。「ワー・ン・ヤニュー」と「ホー・ヨー・ンゴル」を兼ねた者もいた。また、「ワー・ン・ヤニュー」「ホー・ヨー・ンゴル」は、一般の人には見えない「もの」（霊）を見ることができる特別な能力をもった人でもあって、「ホーマが来る、ホーマが来る、火を焚いて、家に入れ」と警告してまわったりしたともいう[5]。

例えば、次の事例は、イケラムというシャーマンが、妻の魂をホーマに吐き出させて病気を治した、という話である。

【事例 1】（ポンナップ）

ポンナップには、ドイツ時代から日本時代にかけて、島の首長にもなったイケラムという名の男がいた。彼はワー・ン・ヤニューでありホー・ヨー・ソゴルでもあった。このイケラムについて、次のような話が伝えられている。

ある日の夕方、タロイモの畑で仕事をしていたイケラムの妻が、タロイモの葉の陰に変なものが横切ったのを見たら、急に気分が悪くなったので、仕事をさっさと切り上げて家に戻ったが、その日から重い病気になった。そこで、イケラムが神懸かって占ったところ、妻が見たものはホーマで、そのホーマが妻の魂を食べてしまったので病気になっている、というこ

[5] 小松和彦「憑霊現象・治療儀礼・物語――中央カロリン諸島のシャーマニズム」『待兼山論叢・日本学篇』第 27 号（大阪大学文学会、1993 年）、1–13 頁。

とがわかった。妻の病気の原因を突きとめたイケラムは、ヤシの殻に呪薬を入れ、ホーマが出た畑に出かけた。イケラムがタロイモの葉の蔭に隠れていると、同じ場所にホーマが現れた。そこで、そのホーマの後ろにまわって首を捕まえ、思いきり締め上げて、食べてしまった妻の魂を吐き出させ、そして、持っていった呪薬の入ったヤシの殻にそのホーマを封じ込めてしまった。吐き出された妻の魂が病気の体に再び呼び戻されたので、だんだん妻の病気も良くなった。

ポンナップのシャーマニズムは、日本のシャーマニズムとは異なっている。日本では、病気は悪霊が乗り移ることで生じると考えたが、ポンナップでは、病人の魂が悪霊に奪われることで生じるのである。日本のシャーマン（密教系の祈禱師者など）は病人に憑依している悪霊を呪力で退散させることで治し、シャーマン自身が神懸かることは少なく、それに代わって「依坐」などと呼ばれる「霊媒」を用意し、その者に神や悪霊を乗り移らせた。また、日本本土では、祈禱師にせよ、霊媒にせよ、奪われた魂を探しにいくことはない。

ヤニュー・ヤラマあるいは境界的・両義的存在

ポンナップでは、こうした宗教者に対応する「説話上の宗教者」を、「ヤニュー・ヤラマ」という。「ヤニュー」とは神、「ヤラマ」とは人間を意味するので、これは「半神半人」あるいは「双方の属性をもった者」ということを意味する。ヤニュー・ヤラマは人間世界と神・妖怪の世界の双方を行き来し、人間の世界では人間の姿になり、神や妖怪の世界では、神や妖怪の姿になるといわれており、あるときには人間の味方になり、あるときは神や妖怪の側に立つといわれている。ようするに、両義的・境界的な存在である。

例えば、次の事例は、ヤニュー・ヤラマの境界性・両義性をよく表しているといえるだろう。

【事例 2】（ポンナップ）

村のはずれのパンの木の洞に、ヤニュー・ヤラマが住んでいた。ある日、ホーマが森で出会った男を捕まえようと追いかけてきた。これに気づいた男は、一生懸命に逃げ、もう少しで捕まりそうになった。だが、たまたま大きな木の枝があったのでそれをくぐったところ、ホーマはその枝にぶつかって痛がった。その隙に、男はさらに遠くに逃げたが、ホーマはまた追ってきた。また、捕まりそうになったが、今度は大きな木の根が地面から出ていたので、それを飛び越えて逃げた。ところが、ホーマはその根に蹴つまずいてひっくり返ったので、その隙にまた遠くに逃げた。こうして、村（モホール）のはずれまでようやくたどり着いて、ヤニュー・ヤラマの住む木の前まで来た。いち早くそれに気づいたヤニュー・ヤラマは、逃げ帰った者を洞に招き入れ待っていると、そこにホーマがやってきた。ホーマがヤニュー・ヤラマの洞に首を差し込んで来たので、その首をひっ捕まえて締め上げたところ、ホーマは悲鳴を上げて降参した。見るとそのホーマは、女のホーマだったので、「おれの妻になれ。なれば命は取らない」と言って妻にしてしまった。

日本文化的な脈絡では、ポンナップのレワルに相当する領域は山であり、モホールに相当す

るのは人里・ムラである。そしてポンナップの場合はこのレワル（森）とモホール（村、人里）の境界は「村はずれ」であり、日本の山と人里の境界は、「辻」や「峠」「川」などである。

ホーマは「化け物」「鬼」「妖怪」と訳せばさほど問題はないが、日本の説話的形象のなかから、ヤニュー･ヤラマに相当するような存在をすぐに想起することは難しい。しかし、自然的･文化的環境の違いを考慮しつつ伝説や昔話を検討していくと、同様の存在を探し出すことができる。例えば、次のような話は、このことを考える手掛かりとなるだろう。

【事例 3】（ポンナップ）

昔々、ポンナップに、家や舟などを壊したり、人の妻に乱暴を働いたりしたために、皆から嫌われているタウスという名の男がいた。あまりの乱暴ぶりに困り果てた人々は、ひそかに相談して、タウスを殺すことにした。そして、彼の寝込みを襲って縛り上げ、舟で沖に運び出し、石を重りにして海へ投げ込んだ。重しをつけられているので、タウスはどんどん沈んでいき、海の底に至った。

そこには、大きな家（カヌーハウス）があった。その家から年を取ったおじいさん（この老人はヤニュー・ヤラマであると説明される）が出てきて、「ここは人間が来るところではない。この家にはホーマ（鬼）が住んでいるから早く帰れ」と教えてくれた。男が、どうして自分が縛られてこのように海の底にやってきたのかを説明したところ、そのおじいさんは同情し、縛っていた綱をほどいて家の中に招き入れ、食べ物を与えてくれた。おじいさんは男に「ホーマたちは今、食べる人間を捜しに海の上の陸（人間の世界）に出かけている。夜になったら戻ってくる。そのときには、家の隅に置いてある家財道具の陰に隠れていなさい」と教えてくれた。夜になり、ホーマたちが戻ってきた。家に入るとホーマたちは、「人臭い、人臭い」と言った。ところが、その老人は「ここには人間はいない。きっとあなたたちがさっき人間の世界に行って、捕まえて食べた人間の肉のにおいが残っているのだ」と怪しんだホーマたちをなだめて寝かしつけた。翌朝、ホーマたちはまた人間の世界に出かけていった。すると、老人は家財道具の陰に隠れていた男を招き出して、「ホーマはもういないよ」と言って、食べ物を与えたりしたあと、「私の知っているホーマの「ロン」（秘密の知識、魚を獲る呪術や魚のいる場所など）を伝えよう」と一つ授けてくれた。

夜になるとホーマが戻ってきたので、またその家財道具の陰に隠れた。翌日も同じようにして、ホーマがいなくなったあと、老人は知識を授けてくれた。こうしてホーマの家に隠れ住みながら、そのおじいさんに助けてもらい、いろいろなロンを身につけていったが、やがて男は自分のふるさとに帰りたくなった。「帰りたい」と言ったら、そのおじいさんは「では、朝になったらホーマたちが人間の世界に出かけていく。そのときに、ホーマの姿に身をやつし、彼らに混じって人間の世界に帰りなさい」と言った。

こうして、ホーマの姿に身をやつしたその男は、自分が住んでいる村に帰ることができた。海の中から現れて、村に近づいて来たその男を見た村の人たちは、びっくりした。自分たちが殺したタウスが、海のなかからホーマ（幽霊）となって仕返しに来たのではないかと思ったのだ。しかし、タウスは人々に、「私は幽霊ではない、海の底のホーマの世界にいたけれども、こうして戻ってきた。もう乱暴はしない。だから、どうか私を迎え入れてくれ」と言った。話を聞いた村の人たちは「それだったら」ということになり、タウスを村に迎え入れた。

その後、タウスは、海の底のおじいさんに学んださまざまなロンを使って人々を幸せにしたので、後に村の長になった。[6]

この話を、「ある海辺の村」を「ある村」、「タウス」を「ある男」、「海に重りをつけて沈める」を「村を追放する」、「海の底のカヌーハウス」を「山のなかの一軒家」、「ホーマ」を「鬼」、「ロン」を「打出の小槌」、「男を助けるおじいさん」を「老婆」に変えると、日本で語られている、山の中の一軒家に住んでいる山姥譚のような昔話になるだろう。

このような変換作業によって、中央カロリンの自然・文化環境と日本の自然・文化の環境の違いが明らかになってくる。と同時に、物語構造の類似もまた明らかになってくる。そして、この変換作業が、日本文化を、日本の伝説・昔話の特徴を、浮かび上がらせるはずである。すなわち、日本では、ヤニュー・ヤラマの相当する説話的形象は、「山姥」的存在が圧倒的に多いことがわかる。もっとも、中央カロリンでは、ヤニュー・ヤラマは「おじいさん」とは限らない。「おばあさん」でもまったく問題はない。その一例は、かつて私がウルシー環礁で採集した次の「鉄の歯をもったヴァギナ」の話のなかに登場する「忠告する老婆」によって示されている。

【事例 4】（ウルシー）

昔々、モグモグ島（ウルシー環礁の本島）に三人の兄弟が住んでいた。あるとき、長男が魚取りに出かけた。日が傾きかかったのに少しも釣れないので、モグモグ島の近くの無人島に行ってみようと考えた。その島は化け物が出る島として人々から恐れられていた。化け物島のリーフに入るとたくさんの魚がとれた。一休みしようと島に上陸すると、どこから現われたのか「一人の老婆」が出てきて、「この島は化け物が出るから早く帰りなさい」と忠告して立ち去った。

恐ろしくなった彼は、急いでカヌーのところに戻ろうとすると、今まで見たこともないほど若くて美しい娘が現われて彼を呼びとめた。「私はこの島で母と二人で住んでいる者ですが、あなたは立派な男の方ですね。カヌーに一杯の魚を獲ったのを見ましたわ。どこからおいでになりましたの」と話しかけてきた。彼は「この女は姿かたちこそ美しいがきっと化け物にちがいない」と最初は警戒した。だが、あれこれ話をしているうちにすっかりこの娘に魅せられてしまった。そして、「母に紹介するからぜひ家まで来て欲しい」とせがまれ、彼女の家まで行くことになった。

家に着くと、人のよさそうなおばあさんがやさしく彼を家のなかに迎え入れ、「私はこれから料理を作るから、それまで二人で、2 階で遊んでいなさい」と言った。2 階でたわむれているうちに、彼は彼女の体を抱きたくなってきた。彼女も「私はあなたの妻になってもいいと思っています。私の入れ墨を見たくはありませんか」と言って、積極的に彼を誘ったので、彼は彼女を抱きしめ、固くなっていきり立つ彼のいち物を彼女の女陰めがけて突っ込んだ。そのとき、激しい悲鳴が彼の口から発せられた。しばらくして、息絶えた彼の体はバラバラにされて、料理鍋のなかに放り込まれ、女陰のなかから吐き出された彼のいち物もそこ

---

[6] この話は、前掲「ポンナップ島の首長制素描」において紹介した。

に投げ込まれた。

数日後、次男が、行方不明になった兄を探しに化け物島へ出かけた。やはり見知らぬ老婆が現われて「ここは化け物が出る島だから帰ったほうがいい」と忠告した。次男は、「私は行方不明になった兄を探しに来たのだ」とわけを話すと、「その男はきっと化け物に食べられてしまったのだろう」と告げた。これを聞いた次男が、「それならば、兄の仇を討ちたい」と言うと、老婆は「そんな危険なことはやめて帰ったほうがいい」とすすめた。だが、彼は承知しなかった。「それならば仕方がない。しかし決して化け物に出会っても化け物の入れ墨を見てはいけないよ」と教えた。

老婆が立ち去り、次男が島のあちこちを探しまわっていると、美しい娘が現われて、彼を家に誘った。彼は、最初は化け物にちがいない、と警戒していたが、2 階で話をしているうちに、ムラムラと欲情が湧き起こり、老婆の忠告を忘れて彼女を抱いてしまった。悲鳴があがり、彼の死体もまた鍋のなかに入れられてしまった。

数日後、今度は一番下の弟が、二人の兄を探しに化け物島にやってきた。例の老婆が現われ、彼に忠告した。末弟がわけを話し、「もし兄たちが化け物に食べられたのなら、その化け物を退治したい」と言うと、老婆は、化け物にだまされて入れ墨を見ないように、と忠告した。賢い弟は、老婆の忠告でおよその察しがついたので、知恵を絞って退治する方法を考えた。

やがて、どこからともなく現われた美しい娘が、彼を家に誘った。2 階で話をしているうちに、二人の間もうちとけ、娘はしきりに彼を挑発した。弟は、「なるほど、兄さんたちはこうしてだまされたんだな」と思いながら、娘に合わせてたわむれていた。そのうち、娘は我慢できなくなったのか、「早く、早く」とせがみだした。そこで、彼のいきりたついち物で彼女の女陰をなでまわし叩きながら「よーし」と掛け声を上げて、女陰めがけて突き刺した。恐ろしい悲鳴があがった。

しかし、その悲鳴は弟のものではなく、娘の声であった。二階から醜い化け物になった娘の死体が投げ落とされた。それを見た老婆は、けたたましい叫び声をあげて逃げようとしたが、弟に捕まえられて、蛮刀で斬り殺されてしまった。女陰に突き刺したのは、彼のいち物ではなく、この蛮刀だったのである。この化け物は「ンギ・パラン」と呼ばれる女の化け物であった。[7]

この話は、ウルシーでは二人の兄は化け物の「鉄のように固い歯をもったヴァギナ」で男性器を食いちぎられて死ぬのだが、ポンナップの同様の話では「鮫の歯のような歯をもったヴァギナ」をもった化け物に殺されたと語られている。

ポンナップでは、二人の兄弟の場合、「ロンゴ・ラップ」と「ロンゴ・リック」という兄弟として語られることが多い。ロンゴ・ラップとは「たくさん聞く」（たくさん話さなければ理解できない者）という原義で「愚かな兄」を、ロンゴ・ロックは「少し聞く」（少し話しただけで理解できる者）という原義で「賢い弟」を意味する。三人兄弟の場合は、アウティ・ラップ（親

7　この話は、「恐怖の存在としての女性像──化け物退治譚の深層」（『現代思想』1982 年 11 月号「異人論」青土社、1985 年に収録）において紹介した上で比較論的に検討したことがある。

指)、アウティ・ティーク(人差し指)、アウティ・リック(小指)という名の三人の兄弟の話となっている。

日本にもこの話と物語の構造がよく似た、「二人兄弟化け物退治」あるいは「三兄弟化け物退治」と名づけられている昔話群がある。次の話はその一つである。

【事例 5】(日本)

ある所に三人の兄弟がいた。三人とも武芸にすぐれていた。そのころ奥山に化け物がいるとの噂があったので、一番上の兄の太郎が「俺がその化け物を退治してくる」と家を出た。山のふもとまで行くと小屋があり、「白髪の老婆」がいたので道を聞くと「やめて帰ったほうがよい」と言った。太郎が「それでも行く」と言うと、老婆は「それなら、谷川の滝の鳴る音のとおりに行くも帰るもしなさい」との助言を与えた。さらに山に入って行くと、深い谷があり、大きな木が茂り、気味悪い感じになってきた。すると、向こうから一人の美しい女が歩いてきて、太郎と行きあった。女はにっこりと笑い「どこへ行く」と聞いた。「この山の化け物退治に来た」と言うと、女は「そりゃまだまだ遠い、ちょっと休んでから行くといい」と言った。太郎が立ち止まると「立って休むんなら坐って休んだほうがいい」と言うので坐って休むと、また女が「坐って休むんなら寝て休んだほうがいい」と言う。そこで太郎が寝ると、女は大蛇になって太郎にぐるぐると巻きついて絞め殺してしまった。

家ではいくら待っても山から太郎が帰ってこないので、次郎が兄を迎えに奥山に出かけた。山のふもとで老婆に会い、忠告を受けるが、いっこうかまわずどんどん奥山に入っていった。そして同じように、大蛇に殺されてしまった。

今度は二人の兄をたずねて、三郎が奥山に行った。一番目の兄がしたように山のふもとの小屋に住む老婆に道を聞くと、このときばかりは老婆も引き止めず、「お前なら行っても安心だ」と言った。暗がりの林にさしかかると美しい女が歩いてきて、三郎に「どこへ行くのか」とたずねた。「山の化け物を退治して兄の仇を討つために」と答えると、女は「その山はまだまだ遠い、ここでしばらく休んでいくといい」と言って、兄たちと同じように三郎をそこに寝かせた。三郎はそれで寝て休んだが、右の目を休めれば左の目を開けておき、左の目を休めれば右の目を開けて、女の様子を見ていた。すると女は大蛇になって絡みついてきたので、刀を抜いて切ってかかり、ついにその大蛇を切り殺した。退治してから大木の陰を見ると、たくさんの人の骨が山と積まれてあった。そのなかに兄たちの脇差がまじっていたので、それを持って家に戻った。[8]

日本では、中央カロリンのようなセクシャルな要素が消え失せており、美しい女に化けた大蛇の誘いに乗って気を許した隙(一人で休息をとっていたとき)に食べられてしまうという話になっている。このあたりにも文化の違いが現れている。

[8] 関啓吾編『日本昔話大成』第 4 巻(角川書店、1978 年)に、この類型の昔話が多数示されている。

ポンナップの怪談――愛する妻が「怨霊」となる？

ポンナップにも、日本の幽霊と同じような霊が出ることがある。それは「ホーマ」という言葉で表現されたり、「誰それの霊」（ンゴル○○）と表現されたりする。その出現の仕方は明らかに日本の幽霊と重なる面がある。

しかしながら、次に紹介する幽霊譚の結末や島民たちのコメントを聞くと、日本人としては当惑せざるをえないだろう。

【事例 6】（ポンナップ）

昔、イヨルとアナウンポンナップというたいへん仲の良い夫婦がいた。イヨルは妻のアナウンポンナップをとても愛していたので、いつも「もし私より先にお前が死んだらどうしよう。きっとお前の後を追って自殺するだろう、新しい女も探さない」と妻に言っていた。アナウンポンナップはこの言葉を聞いてとても喜んだ。

あるとき、アナウンポンナップが病気になった。病気がだんだん重くなって、イヨルの看病の甲斐もなく、とうとうアナウンポンナップは亡くなってしまった。人々が遺体の置かれたカヌーハウスに集まってきて、イヨルとともに泣き明かした。イヨルは泣き叫びながら、アナウンポンナップの遺体の穴に布切れをしっかり詰めた。イヨルの悲しみはたいへんなものであった。家の柱に体をぶつけ、蛮刀で身体の至るところを傷つけ、周囲の者が押し止めるほどだった。

やがて夜も明けて、遺体を埋葬しなければならなくなった。遺体はたくさんの腰巻用の布でくるまれたあと茣蓙（ござ）に包まれ、船に乗せられて、葬送場所であるファナリック（無人島）に運び込まれた。親族たちが埋葬用の穴を掘っているあいだも、イヨルは泣き続けていた。

死んだアナウンポンナップの霊は、イヨルと別れがたかったのだろう、埋葬後、アナウンポンナップの霊もイヨルについて戻ってきた。船が着くと、島中の家々で火をたくさん焚いた。葬送船とともに、死霊や悪霊のたぐいがやってくることがあるので、家のなかに入れないようにするためである。その日もイヨルは、親族とともに泣き明かした。翌日の夜もイヨルは泣き続け、疲れ果てて寝込んでしまった。

夜中にイヨルは目を覚ました。もうイヨルは泣かなかった。そして、何を思ったのか、そっと家の抜け出すと、近くの家に忍び込んだ。その様子を見ていたアナウンポンナップの霊も、その後に付いていった。そこにはリエリエビッグファンという若い娘がいた。男が忍び込んできたことに気づいたリエリエビッグファンが小声で「誰？」と聞くと、「イヨルです」という返事があった。リエリエビッグファンは驚いて、「嘘でしょう？　彼はアナウンポンナップが亡くなったので、家で悲しんでいるはずです。私のところに忍んでくるなんて考えられない」と言った。「いや、本当にイヨルなんです。私は妻が亡くなってとても悲しい気持ちです。たくさん泣きました。でも、いくら泣いても彼女は戻ってきてはくれない。それで気づいたのです。早く彼女のことを忘れないと、私はこれから生きていけない。リエリエビッグファン、どうかこの私に生きる力を与えてください」。イヨルはとても評判の良い男でしたし、リエリエビッグファンもイヨルのことが好きだったので、「私はかまわないけど、まだモゴノアヘイヤル（葬式終了・喪明けの祝宴）も終わらないうちに二人で遊んで、奥さん

の霊が怒らないかしら。私はとても怖いわ」と返事をした。だが、それでもイヨルはその場に留まって帰らなかったので、とうとう二人は一晩一緒に過ごすことになった。アナウンポンナップの霊は、その様子を一部始終見ていた。

その翌日、人々が集まってモゴノアヘイヤルが開かれた。その晩も、イヨルはリエリエビッグファンのところに忍んできた。朝になって立ち去るとき、イヨルは「午後になったら、村はずれの私の作業小屋に行って待っていてください。あそこなら周囲を気にせずにゆっくり二人で遊べるから」と告げた。

午後、イヨルは人目につかないように、村はずれの作業小屋に向かった。アナウンポンナップの霊もそのあとに付いていった。小屋にはリエリエビッグファンが待っていた。イヨルが彼女のそばに座ると、リエリエビッグファンが、「イヨル、アナウンポンナップが生きていたとき、あんなに愛し、死んだときもとても悲しんだのに、彼女のことをもう忘れてしまったの」と話しかけた。イヨルは「もうアナウンポンナップのことは言わないで。さあ、私と遊ぼう」と言って、彼女を抱き寄せ、彼女の腰巻を脱がせようとした。ところが、普通の女は腰巻を一枚しか身に着けていないのに、どういうわけか、まだその下に腰巻があった。イヨルは、おやっと思いながらもその腰巻を取り除いた。ところが、その下にもまだ腰巻があった。イヨルはいやな予感がして背筋が寒くなった。だが、勇気をふるって次々に腰巻を取り除くと、ようやく女の太股が出てきた。女を抱きながらその太股をちらっと見て、イヨルは驚きと恐怖の悲鳴をあげて、腰を抜かしてその場にへたり込んだ。リエリエビッグファンと思っていた女の太股には、自分が彫り込んだ入れ墨があり、陰部の穴には自分が詰め込んだ布切れが見えたからだ。「イヨル、どうしたの、さあ、私を抱いてちょうだい」。イヨルは恐ろしさのあまり声も出ず、ガタガタ身体を震わせるだけであった。リエリエビッグファンと思っていた女は、アナウンポンナップの霊がリエリエビッグファンの姿に化けていたのだ。

やがて、リエリエビッグフアンに化けていたアナウンポンナップの霊が、生前の姿になってイヨルに語りかけた。「イヨル、私はアナウンポンナップです。あなたと別れがたくて、お墓に埋められたときから、ずっとあなたに付いていました。私はあなたが生前に私にいつも言ってくれていたことを覚えています。それなのに、モゴノアヘイヤルも終わらないうちに、他の若い娘のところに忍んでいきました。私は裏切られました。そんなあなたに恨みごとを言うために、こうしてあなたの前に出てきました。でも、もうあなたのことは忘れることにします。ですから、新しい女と結婚するなり遊ぶなりしてもかまいません。あなたとはこれで永遠のお別れです」。そう言って姿を消した。イヨルは、「私が悪かった、どうか私を許してくれ」と泣き叫び続けた。

しばらくして、きれいに着飾った本物のリエリエビッグファンが小屋の中に入ってきた。その姿を見るなり、イヨルは、「お前がいけないのだ、お前がいけないのだ」わけのわからないことを叫びながら、彼女を激しく叩き、追い返した。[9]

[9] この話は、小松和彦「文化人類学手帖――ポンナップ島民族誌ノート(4)」(『ライフサイエンス』第12巻4号、生命科学振興会、1985年、72–76頁)で紹介した。

この話を詳しく聞くと、私たちからすれば、ポンナップの幽霊はあまりにも憎むべき相手に対して寛容だと思わざるをえないのではなかろうか。私は、この話を聞きながら、夫は妻の幽霊によって狂い死にさせられるのだろうと思っていた。ところが、「私との約束を裏切ったわね。でも、こうして恨みごとを言ったので、もう許してあげる」と述べると、あっさり立ち去ってしまうからである。

そこで、この話を聴かされた後、私は島の人たちにかいつまんで「東海道四谷怪談」のお岩さんの話をしてみた。すると、ポンナップの人（男）たちのコメントは、お岩さんの恨みが深すぎると言い、伊右衛門に同情的なのである。「伊右衛門が妻を殺したのはいただけない。そんなことをしないで、さっさと古い妻と別れればよかったのだ」。

なぜなのか。それはポンナップの男女観・結婚観の違いによっているのである。この話のポンナップにおける教訓は、「夫は生前に妻と馬鹿な約束をしたものだ。そんな約束をするものではない」であった。

この話と似たようなことを、私も調査中に体験したことがある。私の世話をしてくれていた老夫婦の娘夫婦の話である。私より少し若い、仲の良い夫婦であったが、滞在中、その夫が事故で亡くなった。その葬儀の様子をビデオカメラに収めたところ、泣きくれていた妻が、今度来るときにそのビデオのコピーを是非持ってきて欲しいと頼んだので、1 年後に訪問したとき、手頃な長さに編集したビデオテープを土産代わりに持参した。島に到着してほどなく、その娘がにこにこしながら挨拶にやってきた。娘の後ろに男が立っていた。なんとその男は娘の新しい夫だった。とてもビデオテープを渡せるような雰囲気ではなかった。その後、娘の両親にテープのことを話すと、口を揃えて「そんなテープは捨てろ。そんなものをみんなの前で上映したら、娘の亡夫の幽霊が出てくるかもしれない」と言うのであった。

ポンナップの社会では、この娘の早々とした再婚はけっして非難されるようなことではない。ポンナップでは、死者が出たとき、残された者たちはその死を思い切り泣き悲しみ、遺族の女たちは頭を剃り、男たちは自分の体を蛮刀で傷つけたりすることで追悼の意を表現する。しかしながら、その後は、できるだけ早く死者のことを忘れ、「今」の生活を充実させるほうが好ましいと考えているのである。

異文化の伝説・昔話の理解・説明は難しい。しかし、異文化との比較は、日本の文化、日本人の価値観、結婚観や恋愛観、世界観などを照らしてくれる貴重な素材でもあるといえるだろう。